

赤穂城

萃岳寺

忠義塚の秘文ハ後以忠慮と云者の記あり 後以忠慮ハ通称平
助と云 然陽と号す 赤穂領の農家此子あり 幼少より才
氣勝主風慧の誉れあり 赤穂の門より 好小龍拜使の聘
小徳ハ信官とある 忠慮十二三歳のころ 右石の翁子希子
出入りより 良雄と云才学と愛し 幼少の時より 紋付の
刀と典小今子不その翁子藏せり

忠義塚

元禄十五年十二月十四日故内匠頭浅邦長矩朝臣臣大石良雄等
四十六人相與謀為其君報讎 夜襲殺吉良義英朝臣東身歸官
官分拘各處 踰年議成 越二月四日有命 遂賜自裁云 今不具其事
蓋侯自祖考三世得君 赤穂 恩惠之隆 巨氏一體遺愛之深 其事五

十年諫一至此猶涉々 然臣下近年府臣其為之管 諸君墓於城北
花藏寺中刻石表焉 民莫不悅 今茲三月遂重伐巨石立碑於
墓道之東 爲之辭 夫諸君之列 譬如日月之麗 天萬世罔隊
初不假人言 與彫刻 然非此 無以慰思焉 則不有斯舉 又將爲何
如 庶也 郡人不可 辭 謹為之銘 欽文ハニニニ 畧す
寛延三年庚午三月十四日 郡人 赤穂 利業 松本 善直 柴原 教長 更
藤利 微 洞春 元 柳 吉甫 等 建



義士哀歌

赤城少府亡身後三百家臣任轉蓬大石先生諱良雄卧龍志氣
 薄蒼穹君憐弗共天下寢苦枕干獨盡忠寒抱冰多復拯火朝
 思暮思心忡々一後歿血洛山蒸罕十六人向周東殘生吞炭喪姓
 名青年孫讓義相同維壬午臘月將半一道橫空貫白如晴雪
 皚々寒隘拾深夜御救衆互中覆兜琴身衣利甲三尺昆吾六尺
 刃金屋琮基渾化血長鎗直判羽林孫先生廟前集首級高唱祭
 文所悃哀有司討瀆同幕府鞠窮俊罪古禪宮二月上旬有賜死
 國人啼泣恨何窮臨刑不謂華亭鶴幾首薙歎語更工山僧瘞
 骨北邙側憤嘗成隊州叢我將韻語記顛末吟執事兮勸善
 功

無名氏哀詩并引

去年季冬十五日故少府赤穂之城主淺野長矩舊臣大石内藏外
 等四十六人異體同心報讎趨義今茲仲春初四日官裁下令各處
 死刑其志雖其生不全天乎果時運乎雖堪哀猶有感作
 開門突出蔑荆卿易水風寒壯士情炭啞形衰追豫讓薤歌淚滴挽
 田橫精誠貫日死何悔義氣拔山生太輕四十六人齊伏刃上天無
 意佐忠貞

義士甲の古歌

歳且の化
 醉義長秋蕭鼓任地多少街
 新舊舊怡吾耳又聞義
 士報

春日新論上 吉良大石 各名氏

獨歩出茅屋 今田湯田 脇脇 龜谷 毛室 豚犬 思判 章入 郭何 早

事向西 實義 杉人 間鎮 美是 歸卧 倒胡 床

弔四十余人 英黃土 何能埋 姓名異 域奉朝 把誰比 強求 維得 白

與嬰

やう討のさくをみる 武夫を重のうてお比入よおとらど

又

義臣空を入 窮泉 望府 功名 經萬年 唯向 不碑 謠 薙露 不知 獲魂

遊何邊

題大石良雄之墓

為之 謀 然 歆 歆 仁 功 成 名 遂 名 埋 身 忠 臣 四 十 余 人 墓 貴 賤 卑 末 落 淚 頻

大名のつゝおぢくものうれ網ひくてもあるぬきおるん

武士のひく手おととき大名ハちろひの網おつぐあるん

讀奉 又 通 普 叙 真 士 本 村 墨 方 負 行

真心 忠 義 遂 大 聖 暫 時 悅 幾 歲 樂 禱 時 哉 是 皆 正 命 死 骸 埋 名

萬人 再 遂

武夫のいさむもあるときえ名の強あるに花若の

元禄 十六 暮 春 初 八 日 多 田 氏 友 直 種 彦 和 本 村 貞 行 等 額

思故 相 思 今 到 東 是 皆 勇 義 遍 胸 中 思 君 報 怨 拚 心 處 孰 免 英

雄原 上 風

百ももせうりふりや秀の才のあまれはちかぬ若の下も
元禄十六年三月八日 大八木村貞初へ手向のすゝあり

吉岡忠孝の墓へ 吉名氏

散る梅よさうりれ桃も今めくむ花もせびるま若の下も

四半の人のうととふ蓮葉のおれあゝその名とのこし

大名主祝の墓へ

十五までをせうり子散るぐうまのあをあげて佛あゝらん

さきひほ世もろろやあちまほくろあをたをん

間森善の墓へ

あろりまき命と君もなるオハゆりまよまらちりり人

矢所右衛門の墓へ

づる目の老うもきえんて夕九子いせん言集るるるらん

間十津市の墓へ

一張の弓もくちをぬ武のせいら

法園尼念持辨才天像



集古字堂印施

小孫古秀和像

ウツロヒヤ

百一十

年と経く

はい

あり代への



古秀和梅 志すは家法を燃てくくして
世をうは素入りの梅秀和

一 名は古秀和は梅秀和の

本別名也

一 是名古秀和は梅秀和の

一 名は古秀和は梅秀和の

一 名は古秀和は梅秀和の

一 名は古秀和は梅秀和の

一 名は古秀和は梅秀和の

一 名は古秀和は梅秀和の

夏と云ふ事ありては得た合点なき地と
 明らざるに違ふ事ありて細細法依りて
 公多しと云ふ人をして信ぜしむるに
 中ふらざるに違ふ事ありて細細法依りて
 作有らざるに違ふ事ありて細細法依りて
 細細法依りては違ふ事ありて細細法依りて
 右の人と云ふ事ありては違ふ事ありて
 所下中

松平の御書

二つ中より手書左と通する

一 沙那土佐古屋の使若家老古に状

一 戸田重右衛門の使若戸田源五郎八田彦次夫戸田横左衛門杉村

十方夫里見強吉夫可邦治郎吉夫

一 松平安藤の書及分使若小山孫六井上園右衛門丹羽源三郎後庄目

付中に右と通寸志我使若と申上右様と申す諸士自滅と覚悟お

極ノ少及不動居仕

一 松平俊吉の書及分使若小山孫六井上園右衛門丹羽源三郎後庄目

當家との思ふ事今更なる事名法は事茂望ふ事此様は日然何様

茂て居候事申す事此書に尤も申す事書以真辨抄監先手抄一

人茂日日此宅に集ふる事と通す事人々格別寸志有若ハ内

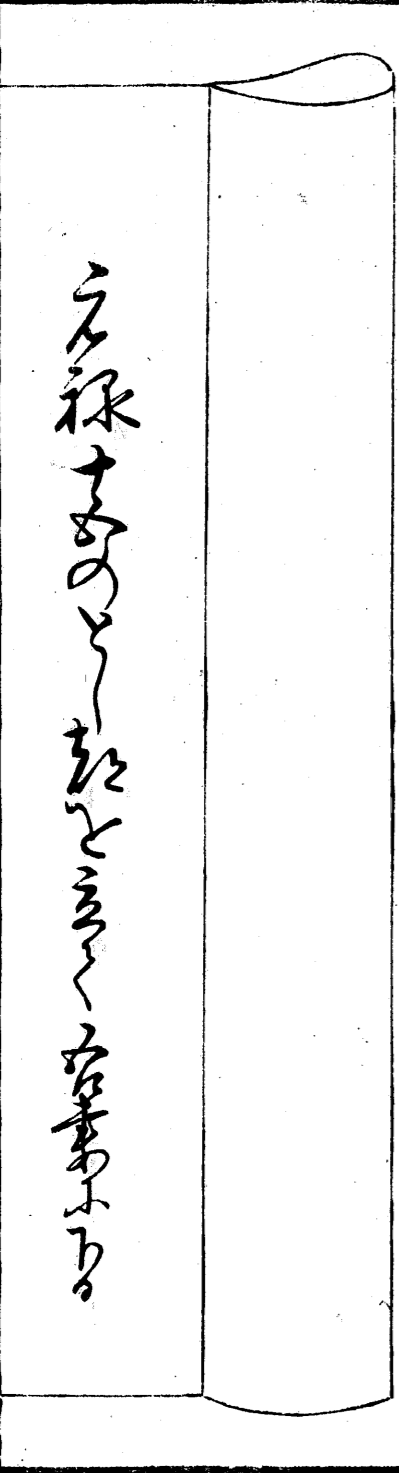
新介の思ふては通し違ふとあるんを内務介傷中一等之を感
小を退と但せ中とあるんを年若くは九女若くも子く毎
日終り城めて事と引渡少後たゞるき中を評者中休く不心
時節一と来めいよの状態を事と上評介及存生と安らう家来上下
此心方とく人々を別言寸志立等中を公候と輕んがて仕振
一と社務と挨拶として止るも外は何れも不殘具足を領獲
本白帷子まじつ半少く書合と義習を少挾策と入るり外老母妻
あも此心方と不中受の女子とささくゆとも不知此心方と通
けつ母妻と此芳志を中受とあるや二重の中上ハハ根下上
前中受の老女又龍城して運と用づき為し事とも二重
及中受も子く外城中と各自減と受候とる事と人々
卯十月

候がうに越ゆる此書中と通と能後と後て中受と女少くも
さのくさるる中受とあるや二重の中上ハハ根下上
中受とあるや二重の中上ハハ根下上

卯十月

小評古十内

小評古十内
中受とあるや二重の中上ハハ根下上
中受とあるや二重の中上ハハ根下上



新介の思ふては通し違ふとあるんを内務介傷中一等之を感


~~~~~

おさくられを細うちうらるるあさ川の  
あはきううはむねあさうきよ  
急坂と細く

別まきよあふあつとたのまひを  
~~~~~  
志賀乃浦ゆく

古くよかくてわん方位めく群
ひりききひききくれ浦松

顔乃なきこらよきあつた
あさあつあつあつあつあつあつ
~~~~~

目しに時あゆみきれい

それおくおひのきききききき  
~~~~~

あつあつあつあつあつあつあつ

よりくあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつ

うきれきぬやふの友は酒のまじ
 及び人としうてさうら
 ち業より目のあるは家士り
 猪やぶるもさく
 浪舟より伊豆の海つちあゆむれ
 ひる代かたふのまき
 江戸ふしうりく縁のまふ古
 友のあまるまき
 枕るゆるれまき 枯るまき

きまたおまのいんじかー好れ家



けまた おまの
 まきの
 まき
 まき
 まき